

平成 26 年度 学校連携事業 夏休み中の学校教員向けワークショップ

「見たことのない私」の描き方 実施報告書

1. 概要

日時・会場：平成 26 年 7 月 31 日 [木] 大阪市立九条南小学校 多目的室
平成 26 年 8 月 4 日 [月] 大阪市立大宮小学校 多目的室
平成 26 年 8 月 5 日 [火] 大阪市立大宮小学校 多目的室
各回とも午後 1 時 30 分 より 午後 4 時 30 分 頃まで

講師：彦坂敏昭氏（美術作家）

参加者：大阪府内に在住か在勤の小・中・高等学校・支援学校の教員
各回約 30 名

後援：大阪市教育委員会、大阪府教育委員会、堺市教育委員会、大阪教育大学

助成：一般財団法人 地域創造

準備物品

【参加者の持参物：1 人当たり】

ケント紙（A3～四つ切りサイズ）1 枚／水彩絵具セット（絵具 8 色以上、筆、筆洗い、パレット）

自分の顔写真を A4 コピー紙などに出力もしくはコピーしたもの 1 枚

はさみ 1 丁／目隠し用のアイマスク・タオル・布

（あれば）スパッタリング用網とブラシ 1 セット

【その他の準備物品：1 会場につき】

床養生用ビニールシート／バケツ 2～3 個／ドラムリール（延長コード）

古新聞／ゴミ袋／養生テープ

A3 コピー用紙 参加者 1 人につき 2 枚／霧吹き 2 個／ドライヤー 2 台

ソフト粘着剤（紙を仮止めする際に小さくちぎって使用するペースト状のもの。繰り返し使用可能。）

マジック 参加者数以上の本数（さまざまな色を用意）

（予備として）スパッタリング用網とブラシ／目隠し用のアイマスク・タオル・布／予備のはさみ

（会場校・主催者・講師で用意）

2. 実施内容

(1) 当日のセッティング

教室の前方にスクリーン・プロジェクター・電子黒板を用意。座席は長机を 4 つずつ合わせて 1 グループとし、1 グループ 6～8 人で座りました。長机は古新聞で養生をし、水を使用するスペースにはブルーシートを敷きました。



ワークショップに使用する道具のスパッタリング用網と
ブラシ、アイマスク、はさみ、ソフト粘着剤など。
(写真は講師が予備として用意したもの)



(2) 講師の自己紹介・作品や活動の紹介

パワーポイントを用いて、参加者に向けて講師から自己紹介や作品・活動の紹介をしました。「描くことによるコミュニケーション」をテーマに、具体的なモチーフを元にしながら、それを大きく変化させる（解像度を低くしていく）自作を例に出し、「現在では解像度が高いことが有用とされているが、解像度の低いものだからこそ様々な見え方がある」ということを話しました。今回のワークショップでは、自分の顔写真を元に抽象化していき、「見たことのない私」というひとつの平面作品を制作したので、講師の制作の根幹にもかかわるこの話は、でき上がった作品の鑑賞の際に大きな道標となりました。



(3) 制作手順

顔のパーツ

- ① 用意してきてもらった自分の顔写真（A4 サイズ）から、自分の顔のパーツの中で特徴的だと思う3つの部分を選んでマジックで囲んでいきます。この時、向かいの席どうしで2人1組になり、2人で1本のマジックを持ち3つの部分を囲んでいきます。自分は顔写真を見ながら、ペアの相手は写真と本人をよく見ながら細かい修正を入れつつ囲んでいきます。
- ② ①の作業で囲んだ線を大切にしながら、選んだ3つのパーツを丁寧に切り抜きます。自分の顔写真にはさみを入れる体験はめったにすることはないので、不思議な感覚を体験しました。
- ③ 切り抜いた残りの写真を、顔のパーツの境目などを参考にしながら7つに切り分けます。



- ④ ②で切り抜いた3つのパーツと合わせて合計10個のパーツを、持参してもらったケント紙の上に配置して、ソフト粘着剤で仮止めします。できる限り元の写真の位置関係を保ちながら構成していくことに注意しますが、ばらばらに切り分けているので、なかなかきれいに元通りの顔の配置にはなりません。



スパッタリング

- ⑤ 好きな色を2色作り「スパッタリング」(網とブラシを用いて絵具を小さな粒子にして飛ばす手法)を行っていきます。画面全体に色がつくように丁寧にスパッタリングします。

スパッタリングで画面全体が色づいたら、乾燥スペースにて乾かします。乾かしている間に、次の工程で「輪郭」を作っていきます。



輪郭

- ⑥ 左手で自分の顔に触れながら、顔の輪郭線をA3のコピー用紙に描いていきます。1cmを5秒の早さで、ゆっくりと描きます。

次に、素早く一筆書きで顔の輪郭線を描きます。これは全てを5秒の早さで、さっと描きます。



- ⑦ 描き上がった 2 つの輪郭のうち、愛嬌があると感じた方の輪郭を切り抜き、乾かしていたスパッタリング済みのケント紙に配置してソフト粘着剤で仮止めします。輪郭を配置する前に、写真のパーツは全てはがしておきます。



- ⑧ 切り抜いた輪郭を配置したケント紙の上から霧吹きで水をかけていき、輪郭で隠れた所以外のスパッタリング部分を滲ませていきます。そして霧吹きでかけた水分を乾燥させます。水分が紙になじんだら、輪郭の紙は外して乾かしていきます。

↓霧吹き後の作品



着彩

- ⑨ 作品を乾燥させている間に、水彩絵具で「まぶたを閉じた時に見える色」を再現します。

乾燥させた作品の、白い部分として残っているパーツ 2 つに、その色で着彩します。そのあと、もう一度乾燥させます。



目隠し

- ⑩ 目隠しをして、ペンで直接輪郭線をケント紙に描いていきます。スパッタリングをしたところはざらざらしていて、白く残っている部分はケント紙のつるつるしている感覚が指先から伝わってきます。



←そのあと、向かいの席どうしのペアで、お互いの黒目を観察し、目隠しをして自分の作品のどのあたりに黒目を描き込むかよく確認します。

しっかりと黒目を描き込む位置を確認し、あとは描き込むだけ、というタイミングで講師から「一度バンザイをして下さい」との指示が出ました。せっかく確認していた黒目の位置が分からなくなってしまい、会場からは苦笑の声ももれました。

再び手探りで黒目を描き込むところを探し出し、マジックで描いていきます。必ずしも思い通りにはいきませんが、だからこそ「見たことのない私」に出会えるのです。



仕上げ・タイトル記入

- ⑪ 最後はタイトルを書き込んで完成。
表情の邪魔にならない所に書き込んでいきます。



完成作品→



(4) 鑑賞会

完成作品を椅子に並べて、参加者全員がお互いの作品を鑑賞しました。同じ指示を受けて制作したにもかかわらずどれも個性的な作品になっており、そのそれぞれの違いを良さとして感じ取るために、講師からの講評はありませんでした。

『思ったことをできなかった、そのことを楽しむ』『自分の思い通りにならない中ででき上がってしまった作品を楽しむ』といった表現することそのものの楽しさを味わいながら、自分の作品以外にもじっくりと鑑賞して、それぞれの作品の良さをかみしめました。



ワークショップの最後に、完成した作品を持って集合写真の撮影を行いました。



3. 実施内容についての評価と課題

反省点と改善点

- ・第一回目である九条南小学校では、はじめは電子黒板を使用する予定で準備をしましたが、画面が小さく文字が見えにくかったため急速プロジェクターを用いてスクリーンに映し出すことにしました。第二回目・三回目の大宮小学校にはプロジェクターが無かったため、パワーポイントの文字を大きく作り替えて電子黒板を使用しました。
- ・霧吹き後、紙が水分をたっぷり含んでしまうので、乾燥はドライヤーを用いても思いのほか時間がかかってしまいました。第一回目はドライヤーを多数使用して、ブレイカーを飛ばすという問題も起きました。幸いすぐに復帰しましたが、それ以降ブレイカーの容量を超えないように注意しました。また、輪郭型の紙をつけたままだとなかなか乾かないので、乾かす前にはがすようにしました。
- ・スパッタリングの際、画面につく色の濃さに個人差が見られました。スパッタリングでしっかりと色をつけていた方が、霧吹き後によく滲み、顔の輪郭型の紙で覆っていた部分との差がはっきりとします。二回目以降は、少し濃いめにスパッタリングするようアドバイスするようにしました。
- ・網に絵の具の膜ができてしまうと、絵の具がうまく飛び散らないので、絵の具の濃さとブラシにつける量に注意するよう伝えました。
- ・講師の作品・活動の紹介の際に、第一回目・二回目では映像作品を流しましたが、説明が長くなってしまふことと、途中の作品を乾かす時間を有効に使うことができないか、ということが問題点として浮上しました。そのことを考慮した結果、第三回目では霧吹き後の乾燥時間に休憩も兼ねて映像作品を流すと、参加者は大変興味深そうに映像作品を見ていました。制作も進んできて、講師の話した概念を実感することができたため、より理解することができたのではないかと考えます。

評価と感想

- ・今回のワークショップは、作業工程をあらかじめ伝えずに、逐一指示して進めていったため、作業途中は完成形が見えませんでした。最後にはきちんと着地点があり良いワークショップだったと思います。
- ・最後に目隠しをすることで、自分の意志の入らない一種の偶然性が作品に入り、本当に「見たことのない私」を表現することができたところが面白かったです。
- ・鑑賞の時に講師が話されていた「思ったことできなかった、そのことを楽しむ」ことを子どもたちに伝えられれば、制作に苦手意識のある子どもでも、表現する喜びを感じ取れるようになります。また「みんな違ってみんな良い」ということは、個性を認め育んでいく学校教育でも活用できることなので、今回のワークショップで体感したことをぜひ子どもたちとの実践に活かしてしてほしいと思いました。

報告者： 柴田美帆子（大阪新美術館建設準備室 外部研修生）